

1

校長が出張で海外を飛び回っている事もわかった！ 生徒会長が三人居て、今その一番偉いヤツが話している事もわかった！——だから、早く誰かこの長ったらしい、欠伸が出る話を終わらせてくれ。退屈で死にそう。早く終わらせて帰ろうぜ！折角午後からの予定がおじゃんになって帰れるんだからさあ……

「少しは静かにしてろアリス。オレだって退屈だつーの」

でも欠伸してねー……それなりに、楽しむ方法でもあるのかー？ あるなら教えてくれよ。

「そうだな、じゃあ、あの中心生徒会長とやらの良いとこを覗いた目だけ三つぐらい探したらどうだ。オレは、話の中にある言葉で面白い言葉作ってるから」

へーへー。それにしても、ブランシュはやけに静かに聞いているな。本も読んでねーみたいだし……

思ってブランシュの様子を眺めるべく、背伸びをして様子を窺うと——つて、寝てるし！ 立ったまま寝れるなんて、器用だな。ん、ポケットに本が入っているって事は、最初は本を読んでいたけど、読み終わっちゃまったとかそんな感じか。やる事がなくなつたから寝た——と。

能天気だなあ、と呆れるところか……それとも上げえなあ、と感心するべきか悩むどころだ。うむむ。いや！ ここは親友として、尊敬するところだな！ よし！ 凄いぞ！ 凄いぞ！

無言で心の中で称える俺を横目に、目の前では生徒会長の話が進んでいる。長つたるくて、面倒くさい話が続いていて、原稿用紙に書いたら一体何枚の作文が完成する事やら。興味はあるけど、調べてみようと言う気にはならないな。確実に、五枚以上は作文として作れるような気がするけど、実際のところ

ろは調査しようとも思っていないから聞の中だ。

しっかし、そんな言葉を原稿用紙も視ずにまあ、全校生徒を目の前にして、均等に視線を配りながら話せるよな。——だけは感心する。長い話に関しては……っ、先生感心しませんよっ！

「何言ってるんだ、オマエ」

「いや、何となく……」

顔を視合わせて、ため息を吐いたところで、ようやく長つたらしい話が終わって解放される。ひやつほう、ようやくかよ！ まあ、まずはさっきの待機室に戻って、もう少し話を聞いてからの帰りだけだな、今の生徒会長サマの話よりは短いだろう。

——まあ、そんな事よりも、俺は頭の中にある野望だけで、今はいっぱいだけだな。



バンドをやりたいと言い出した刹那に、レイの表情が固まって、いつもは無表情固定のブランシュですら、口を「へ」の文字にした。……おー、何か、地雷踏んだっっぽい。てか減茶苦茶呆れられていないか？ 俺。

冗談だろ？ とか次の瞬間には言う事を想像する。当ってたら、新しいぬいぐるみ買う。次はタヌキさんだな、順番的に。

「……冗談だろ？」

おっしやーっ！ 予想的中っ！

「じゃねーよ。お前、マジで言ってるのかって話だよ。あ？ バンド？」

「そーそー。だってさ、高校に入つて、部活に入るんならさ、バンド部だよ！ バンド！ バンドやろーぜ！」

「……」

興味なさそうにブランシュは余所を向く。呆れて物が言えねエワケじゃねーよな？ うん、多分大丈夫だろう。どうせ、他に入る部活もないだろうし。

「入る入らないの問題じゃなくてなー……辞めた方が良いっての、お前じゃ無理」

「がびーん！ オブラートにも包まず、普通に言いやがったなキノヤロー。ちよっとは応援しろよーっ」

「つか、バンド部なんてこの学校にあるのかよ」

「ん、ほれ。レイ今部活の場所視てたろ？ この次の次のページに……ほれ、文系の部活があつて、真ん中辺りにあるんだよ、バンド部。」

「本当だ、と呟くレイ。だろ？ な！ やろうぜ！ バンド！」

「おれ……文芸部に入るから——パス」

「えええ——っ！ マジい！？」

「ブランシユ、キーボード出来るから誘おうと思つたのにーっ！ これじゃあギターとドラムしかいねーっ！」

「てかオレも頭数に入つてンかいっ！」

「いや、当たり前だろ？ スポーツも良いけどさあ、青春はスポーツだけじゃないぜえ……」

「ニート志望のお前にだけは絶対に言われたくないセリフその一だな。青春。青春は繁栄があるから語れるんだぞおい」

「はあ？ そんな理屈とか論理は聞いてねエシ興味ねエシ。つかオマエニート馬鹿にすんなよ！ ニートはなあ、無職と云う名の殻を被った妖精さんだつて、誰かが言つてた。」

「……………そいつと縁切れ。ぜってーにお前を墮落させる為に居るぞ……………」

「あ？ あんで？」

「良いから…………」

頭を押さえてはあ、とため息を吐いたところで、教室移動の話が始まり、俺たちは話を途中にして、体育館に移動する事になる。



…………と、云う訳で途中になっていたバンドの話の

続きをしようと思っているのだがねー。

「オレの気持ちは変わらねーぞ。辞めた方が良いぞ。第一、お前にバンドは無理だ。確かに、ルックスも良いし、ギターも趣味で弾いてるらしいけどなあ——」

「何て言うか、オマエ多分駄目な気がするんだよ」

「根拠のない理屈は嫌いだー」

「うぜーっ！ おまつ！ 何かねーのかよ、感覚的に直感的に危ねーとか、何か無理とか！」

「ないね」

「んだとーっ！ この直感で生きているような存在のクセに……………っ」

「それこそ「んだとーっ！」だつっの！ 直感で生きているのはレイだろーがっ！」

「いつも野生のヤンキーみたいな目つきしてやがって。睨まれたら誰でも逃げるぞ。野生的って事は、それだけで本能で生きているんだぞ。つまり、理性は無いから理屈で生きていない……やっぱり直感で生きているのはレイの方だ！ 俺はマイペースに生きていただけだぜ？」

「……………ここ、キレイところだよな？」

「自由」

……………静寂が訪れて、ブランシユが座っている机と椅子を引っ張って下がっていく。お、わかっているじゃん。てか、多分そこまで飛ぶかも……俺が。

「ぶん！ とか、マジで今殴ろうとしたろ！ ちつたあ手加減してよ！」

「知るか！ ニート予備軍め！」

「んだとお！ ニート舐めんア！」

「あ………LHR、始めて良いか？」

「そんな俺たちの騒ぎを止めたのは、入ってきたメガネの老教師の言葉だった。」

『——あ、すんません』

こんな時ばかりは俺たち、息合うなあ……

LHR——Long-Home-Room——が終わる

のには、二十分もあれば充分だった。そもそも、時

計をみると針は十一時を差しているしな。元々、九時までには受付。んでもって、九時十分から一時間を要して——と、云うのは予定だけで、結局中心生徒会長とやらの話が長ついたらしくて、予定よりも二十分ぐらい伸びて十時半に入學式が終わって……はあ、LHRは二十分掛けて明日からの予定を話して終わり。ようやく解放された。

手渡された資料は滅茶苦茶いっぱいある上に、どれも明日からの本格的な授業に必要だって言うんだから面倒くさい。帰りに収納する為のファイル買わねーと。

それはともかくとして、どうやら部活の説明会らしき代物が午後からあるらしい。何でも、午後からの予定が帳消しになったのは、この学校を運営している人間の息子だか何だかが決めた事らしくて、空いている時間は全くもって予定が皆無だそうで——だから、部活動の人間が部活説明会を聞けらしい。場所はそれぞれの活動場所。例えば、野球部は野球部専用体育館なんてのがあってそっちらしい。サッカー部はグラウンド——などなど。マネージャーの方々が説明してくれるそう。通常の部員の人たちは例のごとく、今日は一日中練習をしているから手が離せないらしい。

ま、どうでも良いけど、さてと……どうするかなあ……レイを引っ張って行くのは決定しているけど、ブランシユを無理矢理連れて行くのはかわいそうだな。

「おい teme、オレの意志はどうなってやがる」
何言ってるんだよ、ニートを馬鹿にしたヤツはニート以下の扱いに決まってるじゃねーかよ。自由意志なんざ存在してないですよばかやろう。

「いやいやおかしいだろ。——法治世界国家『特区』——その中に存在している地域に居る以上は人権ぐらい認めやがれ」

「あー、はいはい。仕方ないなあ、じゃあ運動部も付き合ってるから、その後ちゃんと一緒にバンド

部に行ってくれよな」

「む——まあそれなら良いけどよ。お前本当にバンド部に入るつもりかよ」

「当然」

もう決めたもんね！ 決めた事は何かあっても（いや、余程の事が無い限り……）辞めないのが俺のモットーだからな。

「そんなモットー初耳だわな。」

それより、ブランシユ、オマエどうする？」

後ろの席で資料をファイリングしているブランシユに向かって放つ言葉。つかファイルする気力がよくあるなあ、俺、家に帰ってからやるぞ。それに、今ファイルもねーし。

「アリスは大体やると言っても家に帰ったら忘れる」
厳しい一言ですな、おい。

それより、ブランシユも一応着いてくるか？」

「いい。おれはこれから文芸部の部室に行くから……」

……じゃ

片手を小さくあげて、ブランシユは背中を向けて去って行った……釣れないなア。

「アイツにもやる事があるんだよ。ほれ、行くんなら早く行こーぜ」

そうだな……、促されて、俺は廊下に出る。

——ちなみに、レイが行こうとしている運動部の部室はスポーツ学部の校舎にあるらしい。本当に、クソみたいに、無駄に広い敷地・校舎だな。行くのにどれだけ時間が掛かるんだらうな。SPCのレーザーモニターを展開して時刻を確認する——うーん、現在、十一時十分。

さてと、どれだけ掛かるか、チェックチェック。レーザーモニターは正直、モニターしながら歩くと視にくくなるから、省電力モードに切り替えて、ポケットの中にツッコむ。

……ふあーあ……

……階段ってさー、女の子が通ってちゃいけないよね、視えちゃうから……

「かつたじゃないかとか言っちゃダメだぜ？」

バスケット部の部室は、体育館が二階にあつて、一階の部分に部室の数々があるとか。一階に行くには一旦裏側に回ったところにある扉から入る。中は廊下だから、ノックの必要はない。レイが先に扉を開けて中に入ると、そこには着替えをして練習に向かう先輩方々が居た。

「うおお、やっぱり体育系だなあ。筋肉のつき方とかパネエ。マツチヨだマツチヨ。」

と、あそこでそれを眺めている制服の人間は、俺たちと同じ一年生か。やっぱりバスケットもそれなりに人気あるよな——って、女子も多いなア。女子バスケットって、あつたっけ？

「いや……てか、バスケットじゃねーだろ？ あの女子は」

「あ、そう」

つい女子に目が行った俺は馬鹿の極みだな。

ちなみに、一年生とわかつたのは、俺とレイの腕にも張られている制服専用のシールにある。//1//と描かれたシールで、一年生を表している。制服の腕にはつつけておけと言われて渡されたから貼りつけてるけど、正直ダサイ。女子はリボンの色で学年を視分けている。勿論、パンフレット情報だけだな。

「あ————っ！」

突然、レイが叫んだ。

「んだあ！？」

吃驚したじゃねーか！ なんだ、どうしたあ？

「アイツ……ッ！」

視線をバスケット部の部室に向けると、あ、あの人……受付してた目つきの悪い先輩さんじゃありませんか！ つかまだバット持つてる！ ユニフォーム着てるって事はもしかして、あの人バスケット部！？ うわ、バットとユニフォームがかみ合ってるねー。

一方の先輩の方は……目を細めて、頭を掻いている。——この人、記憶力悪そうだなー。

「お前が言うか？」

「え、俺記憶力良いぜ？」

「……もうツッコむの辞めたよ、面倒くさい」

えー、つまんなーい、構ってよー、レイきゅーん。

「うぜえ」

「ああ、凄くうぜえ」

「うわ、いつの間居たんですかい？」

目の前に突如として現れた目つきの悪い先輩A——

彼の戦闘能力は未知数である！

「妙なナレーションはいらねえよ。それよりも、ここに居るって事は、お前たち、バスケットの説明会に来たのか？」

あ、お前たち、じゃなくて、コイツだけです。俺は違いまーす。じゃっ、レイ。俺やっぱりいいわ、先に行ってる。じゃーねー——っ！

「あ、テメー！」

だってこえーも————ん。



——行ってしまった彼を眺めて、レイはため息を吐く。全く、本当に勝手な人間である。自分のペースしか考えておらず、周りの人間のペースなどお構いなしにかき乱す。

それが、彼の強みであり、弱点でもあるのだが……いや、考えても無駄だ、今は目の前の事に集中する事にする。

「よろしくお願ひします」

「ま、オレはこれから練習あるし、マネジが教えてくれるっての——それより、あのテンション高えヤツどうするんだろうな」

「ああ、バンド部に入るらしいからな、部室に行ったんじゃねーんかね」

「は？ バンド部？」

「バンドやろー、バンドやろーとか言いやがって……」

……

「ああ！ オマエら新入生だから知らねえんだ！」

相槌を打つ先輩を視て、レイは首を傾げた。



「またもや同じ道を歩いて、芸能学部の校舎に足を踏み入れる。……やっぱり長いなあ。連絡通路そのまま通ってくれば、部活棟まで早かったけど、靴が外履のままだったし。はーあ。」

「肩に掛けてあるバッグを手前に持ってきて、パンフレットを元に戻そうとする……あ、ウサビよん……うう、ごめんなあ、もう少し待ってくれよな、母さんが海外から帰ってきたら直してもらうからなあ。俺じゃあ直せないんだよ。ほんっつとうにごめん！ぬいぐるみに謝りつつも、バッグの中にもう一度ねじ込んで、校舎の中に内履に履き換えて入る。……わかってるなら、最初から中から体育館に行けやよかったなあ。まあ、もう後悔遅いけど。」

「——芸能学部の校舎にはもう一つ、連絡通路の向こう側にあるスポーツ学部の校舎へ向かう通路の他に、文系部活専用の部活棟があるとの事。無駄なところに金を掛けるな、この学校。そんな学校どこにあるんだよ……」

「うわ、でけー。これだけで文系の部活専用棟なのか！？スポーツ学部の方は用具室みたいのだったのに、随分優遇されてるなあ。」

「でもまあ結局木造建築で、ギンギシ音鳴ってるけどな……」

ギンギシ……きいきい……

……大丈夫なのか？ 底が抜けたりして……

メシッ！

「今メシッ！ つつたぞ！ 本当に大丈夫なのかなー。途中で底が抜けて俺が落下とかそんなドリフみ」

「たいな展開は望んじやないよ！。」

「えーと、バンド部の部室は……と。さっきパンフレット見た時には部活棟四階の、音楽室の隣に二列並んでいる音楽準備室——の、第二音楽準備室って書いてあったな。ちなみに音楽室は吹奏楽部で、結構な音が鳴ってるな。第一音楽準備室は合唱部が使用している教室で、発声練習の音が聞こえる……と、その隣の第二音楽準備室なんだけど……おい、何の冗談だよ、これ……音一つしねーッ！ 静か過ぎるだろお！」

「……扉を叩いて、中に入る……と、云うシーケエンスがなかなか出来ないんだけど……。だってどうよ？ 調弦をする音すら聴こえないし、メトロノームを動かす独特のカチカチの音もしねー。そんなところをバンド部と認めて良いのだろうか？——いや、待て、もしかしたらアレだ！ 不良しか居ない駄目部活とか！ それもそれで困るけどな。ま、潰れかけよりはマシか。」

「今度こそ、扉を叩いて、ゆつくりと、バンド部、と小さく書かれている部室の中に入って行く。」

「し、失礼しまーす。バンド部に入部したいんですけど……」

「中に入ると、そこには……」

「ようこそ、バンド部に」

「一名ぼっちの、男の先輩が足を組みながら座っていた。」

「えーと……」

「いや、良かったよ。一人でも、部員が来てくれて」

「一人でも？ 部員？」

「僕の名前は、羽須美七夜。このバンド部三年生の部長だよ」

「はあ——それより、あの、他の部員は？」

「嫌な予感がピンピンする。」

「——居ないよ。」

「何せ、バンド部は、部員は僕しか居ないんだから——」

